

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第十三号（二〇〇七年六月）

（特集 ふるさとの文化を考える）

（特集1）

伝話と対話

白井啓治

ことは座の朗読舞女優、小林幸枝さんと出会って丸二年が過ぎた。聾者である彼女に初めて会ったとき、手話が全く判らない私であったが、彼女の言葉を手話に表現する中に稀有なスケール感のあることに、大きな衝撃を覚えたのだった。小林さんは、バリアフリーを目指した市民劇団「しゅわーど」のことを聞きに来たのであったが、彼女に表現のスケール感を観てしまった私は、半ば強引に「明日からいらっしやい」と、演劇表現の世界に引っぱり込んだのであった。

それまで全く演劇の経験はなかったのだったが、演出家としてはそれが幸いだったと思う。変に詰まらぬ市民劇団などで、独り善がりの演劇を覚え、カラオケ演技の癖などをつけしまっていたら、折角の才能が伸びなくなってしまうからだ。

小林さんは、私の直観に違わず順調、確実に舞台表現の才能を伸ばしてくれた。

それまで漠然と考えていた朗読を手話の演技

をベースにした舞風の表現も、彼女と出合った事によって、朗読舞&朗読舞劇というこれまでにない、全く新しい舞台表現として確立させることが出来た。

小林さんを指導し始めて一年が過ぎる頃、このまま市民劇団という狭い範囲で演劇を続けても、彼女の持つている才能を十分に伸ばせないだろうと判断し、彼女にその意思があるのなら、石岡発のプロとしての朗読舞劇団を立ち上げてみたいと考え、彼女と何度も話し合いを持って、昨年の十月に朗読舞劇団「ことは座」を設立したのだった。そして、今年の二月から、ギター文化館を拠点として、定期公演を行なっている。興味のある方は是非一度、小林幸枝の朗読舞を観ていただけたらと思う。

さて、劇団「ことは座」を立ち上げてから、小林さんへの指導は、公演へ向けての技術的な稽古に加え、一流の表現者になつてもらうために、自分自身の考えを確りと持ち、伝えることができるようになってもらうために、色々な話題を文章にしてほぼ毎日のように渡している。

文章に渡すのは、私が確りとした手話で話しできないのと、手話に訳せない言葉が多くなる事、そして小林さん自身に文章を読んで自分

の考えを確りと述べる習慣を身につけてもらいたい、というところから交換日記ではないが、日々思いついた話題を見つけては書いて渡している。先日、ちょっと振り返ったら、この半年間に原稿用紙六〇〇枚ほどになっており、吾ながら驚いている。

その中に、先日書いて渡した文に、ふるさとの文化を考える「ふるさと風」の原稿にしても良いと思われるものがあつたので、それを紹介しながら、石岡の文化における現状について考えて見たいと思う。

× × ×
幸枝さんへ。

昨夜の文に書いたが、今日はもう一度、改めて見直し、話を加筆してみよう。

『現代手話の発祥は、フランスである。詳しい実態はわからないが、フランス人の理屈っぽい対話好きの感じからすると、聾者の人たちも健聴者と変わりない対話を形成しているように思われる。これはテレビの報道番組で見ただけではあるが、思考の取り方も日本の聾者の人達とは雲泥の差があるようである。』

幸枝さんたちは戦後の新しい体制の中で、学んできたとは言え、日本の手話言語の確立は遅れており、対話という認識は薄く、それを研究する人達にもまだまだ対話という認識が薄いといえる。

聾者の人で、社会的認知度の高い人の殆どは、小学校の高学年に進む前に、普通教室に変更して通っている。大変苦労はしているが、その事

によって、対話という事の意味が、意識しているかどうかは別にして自然に備わっている。そうでなければ、健聴者以上の社会的認知度を貰う事は出来ない。

幸枝さんの持っている表現のスケール感という才能を大きく伸ばしていくためには、どうしても対話ということの基本を身につけてもらわなければならない。舞台というのは、俳優が勝手にやるものではなく、観客との対話をするという事だから、それを忘れた中には、大成する事はありえないことだから』

さて、聾者の人達の社会参画の定着率の悪さは、ズーツと言われ続けているが、その大きな要因は、日本語としての手話言語の確立が遅れているせいだと言える。

日本語、特に文字言語は、世界にも類を見ない難しさ、美しさ、幅広い表現力を持った言語だと言える。

初期の日本の文字言語は、中国から漢字を輸入して、漢字そのものの意味よりも、音声言語に当てはめるような使い方をされてきた。日本語としての文字言語の確立は、和歌などを見ていると古今和歌集あたりからではないだろうか。丁度、平安の後期ころに現代日本の文字言語が完成されたと言っただろう。

勿論、言葉だから時代とともに新語、造語が生まれると同時に死語もでき、変化はしているのであるが、文字言語としての文体および漢字の使い方は（変化しているものも多くあるが）、当時の延長線上にある。そして、この文字言語

における文体が今日の日本人の思考の基本となっている。

日本語に限らないが、文体というのは、言葉の原義ともいえる「心をたくさん（或いは広く&深く）表現する」ためのある種公式と言える。

つまり、心を正しく伝えるためのフレキシブルな公式と言っただろう。

日本最古の物語とされる「古事記」は、日本語としては未完成の文体である「変体漢文体」で書かれており、その正しい解釈が、未だ成されていない。そのため、その文体から作者の心を汲み取るのは、非常に難しく、色々な解釈がなされ、未だ決定打と言うべきものがない。書かれているストーリーとしての話は解るが、作者の心としてのテーマというものを汲み取ることが難しい。

私が聾者の人と直接接するようになったのは、幸枝さんと出逢ってからである。未だ、わずかな単語を並べるだけの手話しか出来ないのであるが、覚えはじめて感じたのは、日本の手話言語は、古事記と同じ未成熟の文体である事だった。手話だから、語彙の少ない事は納得できるし、手話言語の限界と言っ事ことも良く分かる。

人間のコミュニケーション言語の始まりは、動作言語、つまり手話の原形である。人間が二足歩行をはじめ、声帯が発達してきた事から、複雑な音声を出す事が可能となり、複雑な音声を基に高度な音声言語が生まれてきた。人間も、元々は犬や猫と同じ程度の音声しかなかったの

である。

音声言語の発達に伴って、動作言語は次第に影を潜め、今では遠くの人に合図したりする程度の動作言語しか持たなくなってしまう。この少ない動作言語も、携帯電話や携帯メールの普及で、消滅してしまうのではないかと思う。

しかし、一方では、携帯メールは聾者の人たちにとって、健聴者との言葉の差別といったことが解消できる素晴らしい文明の利器だといえる。視覚判断の早い聾者の人にとっては、願ってもないコミュニケーションツールである。今は未だ、福祉政策の遅れから、聾者の人たちに携帯メールの無料化は成されていないようであるが、そのうちにそうなるだろうと思う。そして手話言語そのものも、文字言語との併用で進歩してくるであろうと思う。

現状の日本の手話言語の大きな問題点は、日本人の思考のベースになっている文字言語による文体と大きく乖離している事である。長い歴史、聾者は差別・障害され、手話言語の確立が大きく遅れたこともあって、思考の基本となる文体が、統一して確立されていないといえる。未だに聾者の人達は、年齢差によって、文体がまちまちで統一した対話形態をつくる事が難しいようである。

戦後六十年を過ぎているのに、未だに明治の初期に始まった手話教育をそのままと言っ問題があるが、そのままに近く進歩させていない、といえる。日本人の共通した文字言語の文体に整合させた手話の確立ができていないのだ。

手話に日本手話と日本語対応手話があると
いうのもおかしな話なのである。同じ日本人と
して、共通の基盤に立った文体としての言語教
育がなされなければ、対話というものが生まれ
ないのである。手話による会話は何時まで経っ
ても伝話のままなのである。

これは私の個人的な定義であるが、会話には
「対話」と「伝話」の二種があり、対話は相互
の理解を求める会話であり、伝話は事を伝える
会話のことをさす。

伝話には、正しく事を伝えるための文法が必
要であり、対話には心を表現する文体が必要と
なる。当然のことであるが文体は文法の上に成
り立っているものである。

私たちは、何かを思いつき、それを実行した
いと思つとき、どうすべきか思考を巡らせるの
であるが、この思考とは心が大きく左右するも
のだから、文法ではなく文体で考える。文法の
思考だけで、物事を決め、実行すると、実行の
中身が寒々しく感じてしまう。間違いはないの
であるが、心を何処かに置いて来たような気分
になってしまう。こんな風に考えるのは私だけ
であるうか。

心を深く込めて話すためには、文体の思考が
重要なのであるが、この文体というのは自分を
主張するためのものではなく、対話という形の
文体で、相手が聞いてくれるための言葉の構成
だといえる。

対話というのは、その主は相手の話を聞くと
言つことで、自分を伝えることは従に属するの

である。そして、ちょっと難しい言い方になる
が、相手から帰ってくる話しが自分の考えを主
張する内容の真実である、ということなのであ
る。そして、説得ということの実際的内容とい
うのは、この文体による対話力のことをさすと
言える。

対話というのは、無意識のうちこのよう
な組み立てで行なわれているのであるが、幸枝さ
んと知り合つて、手話での会話の殆どが伝話で
あることに気付かされたのであった。これでは、
聾者の人達の仕事の定着率が低くなるのは、当
たり前である。そればかりではなく、社会の中
で、真の意味の「自己満足」を充足させること
は出来ないだろうと、気付かされたのであった。

しかし、今、このように日本の手話の未発達
の実態を考えてみる中で、現代の若者達の思考
の短絡振りが思い起こされてしまった。彼らの
会話を耳にしていると、センテンスが短く、文
体としての体を成していない伝話が殆どである
事に気付いた。そして、説得ということの内面
に取り入れることが出来ない多くの若者の実態
を考えると、些か将来に不安を覚えてしまう。

伝話と対話のついでに、人間の思考とその実
態について、資本主義社会の一つの側面から見
てみよう。資本主義社会では使つ側と使われる
側が存在し、殆どの人が使つ側に立ちたいと考
える。これが社会主義社会になると管理する側
と管理される側と言葉が変わるが、中身の実
態は同じである。サラリーマンが少しでも出世
したいと考えるのも、この使つ側に立ちたいか

らである。このような二つの立場がある以上、
当然思考にも使つ思考と使われる思考とが存在
する。

かつて十年ほど、文化・記録映画を製作する
かたわら、経営マネジメントに関する原稿の依
頼を受けて書いたことがあった。そのとき多く
の経営者達と会い、色々な話を聞いたのであつ
たが、優れた経営者の殆どに共通して感じられ
たのは、人を使つという思考がないということ
であった。

何千人、何万人という従業員をリードしてい
くトップ・リーダーに人を使つという思考が無
い、というか希薄なのである。そして、会社を
経営していくためには、人を使つという思考が
あつては、経営ができないのだと気づかされた
のであった。

人を使つという思考でしか物事を考えられ
ない人は、俗に言つ「出世」しても精々中間管
理職止まりである事を知つた。その言えは、「業
務命令」という言葉をよく口にするのは、中間
管理職だ。いわば文法の伝話しか出来ないのだ。
リーダたるもの率先垂範と言われるが、それは
どうやら使つ思考では経営はできないと言つ事
なのだろう。

伝話と対話の実態と全く同じなのである。人
を説得し動かすのは、伝話ではなく対話であり、
文法ではなくて文体なのだ。だから優れた経営
者のは、使つ思考は持っていないのだ。つまり、
使われる思考とは人が納得して行動をとってく
れる文体での対話なのである。手話言語につい

て考えてみて、今改めて、このことの重大性を
感じさせられた。

x x x

さて以上が小林さんへ書いて渡した文章であるが、この伝話と対話をふるさと文化の伝承という側面に当てて考えてみると、伝承というのはそこに対話が込められてあるということである。伝承としての対話とはふるさととしての物語の事をいう。

文化の伝承がなくなるといのは、何処かの時点から伝える物語が文体の物語ではなく、文法だけの話の筋となり、未来への希望を記す標ではなくたってしまったからだと言える。物語というのは、悲劇喜劇に限らずその中には未来への希望が紡がれてあるということである。

文化の伝承を考えた時、一つの文化は一つの民話にならなければいけない。一つの文化が民衆の間に語られる民話となることで、伝話から対話となり、暮らしの心を伝え標す希望の物語となるのである。

歴史とは現代を映す鏡であるといわれている。しかし、鏡となる歴史には文体による対話としての物語が内包されていなければならない。年号と現象としての事実だけを語っても、それは単なる伝話に過ぎず、そこには現代を映す物語としての鏡はない。

打田昇三さんが、毎号ふるさと物語としてこの石岡を中心とした歴史にスポットを当てて書いておられる。私は、編集責任を負わされていることから、打田さんの書かれた文が伝話にな

っている時には、書き直しをお願いしている。私の一回りも人生の先輩ではあるが、突き返すことをしている。

打田さんの対話としての物語がそこになければ、ふるさとを表現する「風」にはならないからだ。お陰で、反論や反発の声を聞く事ができる。打田さんの文章が対話になったのである。勿論、反論、反発の音が聞こえれば、それと同じ数の励ましの声を頂く。とても素晴らしい事だと思っている。

以前、打田さんが百八十枚を越す原稿を持ってこられたとき、これではダメと突き返したことがあった。三、四回それが繰り返された。これだけの枚数を「書き直し」と突き返す事にはかなり勇気がいる。最終的に二百五十枚弱の作品として仕上げられました。その時、これだけの枚数を突き返すのは、大層勇気が要りました。と話したら、返される方がもつと勇気が要りますよ、と言いつ返され二人で大笑いした。

石岡に来て、石岡の伝説を調べる時、必ず今泉氏のまとめられた文に出合った。まとめられた伝説の全てが、記録にとどめた伝話文であるが、大変に貴重な資料文である。

個人的には、伝説の多くは私の創作の範囲にないものであるが、氏の功績には頭が下がるし、いつか伝話として記されたものを、誰かが対話の物語として創作されるだろうと思っている。

今泉氏の資料本を読みながら、舞台上演する台本の冒頭、若しくは終りに、伝承という詩文を載せているのであるが、そこに「伝承の一つ

忘れ、暮らしの一つ沈む」と一節し、結びに「明日の希望の物語の紡げ」と言葉していることを思い起こし、この資料が残される限り、再び民話として明日の希望が紡がれた対話としての物語がルネサンスされるに違いないと思っている。今回は、打田さんの「文化の谷間」の原稿を読んで、その前文のような形で誌してみたが、ふるさとの風を文章に紡いでいこうという「ふるさと風の会」の思いの一端を感じていただけたらと思ってみるが、果して。

「ふるさと風」の会会員募集のお知らせ

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会です。会費は、会報作成費他として月額2000円と勉強会費（講師料）として

月額1000円が必要となります。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-20

(特集)

文化の谷間

打田昇三

昭和六十一年に東京都で第一回大会が開かれて以来、是まで二十二回に亘って行われてきた「国民文化祭」の第二十三回は、平成二十年(二〇〇八)十一月一日(土)から九日(日)までの間に茨城県各地で開催されることになっていて、そのキャッチコピーは「常世の国 筑波 翔ける 文化のいぶき 常世の国 くにぶん祭」だから石岡市でも大いに関係があると思うのだが、一般には未だ具体的なことが知らされていないようである。

合併前の石岡市は五つの市民憲章を掲げており、その一つに「教養を高め文化のまちをつくります」というのがあった。平成十七年十月一日から八郷町との合併で市民憲章は消えたが、合併後の門出に当り「自然と歴史・文化の融合した中核都市 石岡市誕生 今、新たな歴史のはじまり」という市長職務執行者の挨拶(広報いしおか創刊号)があったのだから文化的行事についても、もう少し積極的になって良いような気がする。もともと石岡は工業都市でもなく旧八郷地区を加えても大掛りな産業は無い。誇れるものは文化的遺産と古代に常陸国府が置かれていた、という過去の夢だけである。

それならば「国民文化祭」が茨城県で開催されるという機会を捕えて「石岡の文化」を大々的に宣伝しても良さそうなものだが、先の市会議員選挙で広報を見た限りでは「文化」のこと

に触れた候補者は三十名中六名しかいなかった。それも殆どが歴史・自然・伝統文化を生かす、或いは文化施設の見直しなどに留まるもので、多くの候補者が文化振興の「ぶ」の字にも触れなかった。

「それがどうした！」と市議会に聞き直られても困るので一応、味方のふりをしておくとして、国民文化祭の担当は茨城県、茨城県教育委員会と開催市町村、文化団体等であり石岡も県から言われなければ動けないと思うし、何よりも県の担当正面は生活環境部の生活文化課であり、各市町村の文化事業は教育委員会が所掌している。そのような地方文化行政組織の不備もあつて準備が遅れているのであろう。予定では平成十八年度に事業別実施計画が決まり、本年度に要項が配布されるようになってるので期待して待つことにする。ただ、こういった事業はともすれば役所主導で行われ勝ちなので、この際、行政としても地道な市民活動の中での文化的なものに目を向けて欲しいと思うだけである。

行政の主導による「国民文化祭」は措くとして、この際に「文化、文化と言うが、実体は何か？」という疑問に触れてみたい。

第二次世界大戦で軍国主義(帝国主義)国家から一夜にして民主主義の世界に抛り出された日本は、当り障りの無い方向として「文化国家」を標榜した。これは明治維新でいきなり「文明開化」の波を被せられた明治の国民の戸惑いと同じであり、良く見極めないうで何も分らないままに変な方向に流れてしまった恐れがある。

専門的、理論的な説明はあるだろうが「文化」について我々庶民が承知していることと言えば、欧米風の要素、当世風の便利さ、高い教養、深い知識、洗練された感覚や暮らし、優雅さ、芸術性、人類の価値的所産などを文化と言うらしい。これに対して似たような「文明」があり、「文明社会」とか「近代文明」とか言われるからややこしいのだが、従来は一般的に「人類の精神的、価値的な所産が文化」で「物質的、技術的所産が文明」とされている。近年は「文化のうちで都市的な要素、高度な技術、職業の分化、社会の階層分化を持つ文化の複合体」を文明と呼ぶようになったとか、益々分らない。単純に解釈すると地方が文化で大都会が文明なのだろうか。

その点、歴史学ではハッキリしていて、「文明」には条件があり、文字が発明され、政府が置かれ、金属技術が開始されなければ「文明」とは呼ばれない。世界四大文明(メソポタミア、エジプト、インダス、黄河)は、この条件に叶っているし、他にもエーゲ海文明、アンデス文明、揚子江文明、メソアメリカ文明、マヤ文明、太平洋島嶼(とうしょ)文明がある。四大文明のうちインダス文明だけは未だに文字が解読されていないから内容が不明なのである。文明は交易を通じてある圏内に等質に行き渡る。これを「文化圏」と呼んでいる。つまり文字に代表される知恵と、政府による統治と、金属技術に代表される物質文明とが遍く行き渡ったのが文化圏である。未知のインダス文明も最近の研究で

は他の三大文明の間を繋いだ交易の民の文明であるかと推定されている。

インダス文明は、他の三大文明よりも四、五百年遅れて紀元前二六〇〇年頃に興ったようだが、代表的な遺跡のモエンジョ・ダロ（かつてはモヘンジョ・ダロと呼ばれていたが、研究の大家・三笠宮が正しく修正した）に残された住居跡には、舗装道路、ゴミを屋外に出す仕掛け、排水溝、浄水場などがあり、今で言うところの文化的な生活をしていたことが分かる。一応は文化都市である筈の石岡市では年に何回か県道などの空き缶拾い（ゴミ清掃）を一齐にさせられるが、拾っても拾っても後から投げ捨てる車両などが後を絶たない。道路以外でも人目の無い山林には至るところにゴミの山がある。こうなると拾うことより捨てさせない監視を強化するほうが先決であろうし、如何に生活が便利になろうと周辺にゴミが散乱している状態を「文化圏」と言えるであろうか。

明治維新で先進技術を欧米から学んだ日本は、アメリカなどに較べれば文明度は低いかも知れない。「アメリカ人は『どのような僻地でも蛇口を捻ればお湯が出てコーヒーが飲める』のが最低の文明だと思っている」と、現地生活が長かった先輩から聞かされたことがある。勿論、郊外のことだが、何処までも真直ぐに伸びる舗装道路は何時間走っても変らないから、飼っていた猿に運転させて自分は助手席で寝ていた男が居たそう、その途中に在る家には必ず大きな燃料タンクが付けられているから「お湯の文明

説」も嘘ではないらしい。

そのようなアメリカ力では銃を用いた犯罪が後を絶たない。この頃は日本でも物騒になってきたから（根源が分かっているのに政府・警察が対処しないから）アメリカを批判できないが、銃犯罪が起きる国は文明国家ではあっても文化国家では無いと言えるであろう。良く考えれば、現代は黙っていてもある程度は文明の恩恵には浴すことが出来るが、本当の文化を創造し、維持してゆくことは大変なことであると思えてならない。ただ、我々は人類であり猿でも口ポツトでも無いのだから人間に出来ること、人間にしか出来ないことを成し遂げる。人間らしい生き方をする。それが文化なのであると勝手に決めている。

ご承知のように、茨城県は明治維新に際して水戸藩を中心に「思想」という怪物に操られて同胞たちが殺し合う最低の歴史を展開してしまつた。石岡、宍戸、土浦などの藩も水戸藩の分身のようなものだったから、この騒動から逃れることが出来ずに日本の近代化からは大きく遅れをとっている。その痛手は特に文化面で大きかつたと思われる。徳川家康の最後の息子である頼房を藩祖とした水戸藩とその一門は、他の武家とは違って、固有の立場に置かれた大名だった。参勤交代をせずに藩主は常に江戸にいる定府大名であることのほか家臣団が寄せ集めだったことも二百数十年経つてから影響したのであるまいか。

徳川頼房は、初め江戸城内に屋敷を貰つてい

たが慶長十一年（一六〇六）の江戸城修築を機に下妻十萬石に封ぜられ、さらに数年後には二十五萬石で水戸城主になった。それより先のことだが、佐竹の本拠であった水戸の統治について家康が考えていた榊原康政が辞退したあと、期待された五男で甲斐武田を継承した万千代と武田信吉が領主になったのだが、僅か一年で死んでしまった。

家康は取り敢えず十男の頼宣（頼房の同母兄）を信吉の後に置いた。そのうちに関が原合戦、大阪冬の陣の後始末もついたので、家康は和歌山に封じていた浅野長晟（ながあきら）を広島に移し、水戸の頼宣に数人の譜代大名を付けてから關西の抑えとして紀州へ行かせたのである。水戸も要衝ではあるが江戸に近いから、家康は末っ子である頼房を下妻から移して万千代の代りとした。

本来なら新生・水戸藩の主な家臣は徳川の家臣団から選ばれるのだが、最初に水戸城主になった信吉には滅亡した武田の遺臣が付けられており主だった武將が「万千代様三十三人衆」と呼ばれて猛将・井伊直政（信吉の舅）の指導のもと大きな力となつていたので、家康はそのうち十人を頼宣に付けて紀州へ行かせ、残り二十三人衆を水戸に留めて頼房を護らせた。頼房は数え十一歳の少年である。家康は二十三人衆のほかに頼房の生母・お万の方の親戚や、織田信長に討たれた今川義元の重臣や別所一族、豊臣秀吉に滅ぼされた北条氏の家臣、改易された山形の豪族・最上の臣、さらには水戸から秋田へ

飛ばされた佐竹の家来に至るまで自分の眼鏡に叶った武士を集めて未っ子に付けたのである。

石岡は何人かの外様大名が支配した後、元禄十三年（一七〇〇）から頼房の五男・頼隆が府中藩・二万石の藩主となり、明治維新まで水戸藩の支藩として本藩と同じく藩主不在（常府大名）として続く訳だが、途中で何度も継嗣が絶えて養子を迎えている。同じように水戸藩の血筋も藩祖・頼房の系統には違いないが厳密には水戸黄門の正統ではない。一般に知られているように水戸光圀は兄を差し置いて（三代將軍・家光の意向で）水戸藩を継いだことに負い目を感じて自分の後継者には兄（高松藩主・松平頼重）の子・綱条（つなえだ）を選んだ。光圀の長男といつても若かりし頃に家臣の娘との間に生まれた一人っ子（光圀の奥方は関白・近衛家の息女で早世、側室は居なかった）頼常は、頼重の子として高松藩を継いだ子が無かったため頼重の子・頼章の子が頼豊として高松藩三代目を継いだ。一方、水戸藩を継いだ綱条のほうにも子が生まれず、高松藩主・頼豊の嫡男が宗堯（むねたか）として水戸藩第四代藩主になったから結果としては、兄を措いて水戸を継いだ光圀の系統は絶え、松平頼重の血筋が水戸も高松も明治維新まで繋いだことになる。

水戸光圀は家臣団の充実（人材の登用）に努め、水戸城下を整備し、笠原水道に代表されるように飲料水の確保など民政に意を用いたが、特筆されるのは、大日本史の編纂事業であり、本草医学の普及など文化興隆への寄与である。

一方、高松藩主となった頼重（光圀の同母兄）は、將軍から中国・四国諸藩の動静を監察する特命を与えられていたようだが、藩政に力を注ぎ、農業用水の確保、塩田開発、水道工事、産業の育成に努めて名君と称されている。その一方で水戸や京都から著名な学者を招いて学問を奨励したという。敢えて言つならば徳川家康の孫に当る二人の兄弟のうち、弟の光圀は文化を重視し、兄の頼重は文明の興隆を図ったところであろうか。

歴代水戸藩主の中で傑出した名君とされるのが第二代の光圀と第九代の斉昭で「義烈両公」と称される。斉昭は第七代藩主・治紀（はるとし）の三男として光圀没後百年目に小石川邸で生まれた。長兄の斉脩（なりのぶ）は二十歳で家督を相続し、十一代將軍・家斉（いえなり）の娘を奥方に迎えていたのだが三十歳になっても継嗣が生まれなかった。そこで奥方が、御三卿の清水家を継いでいた自分の弟を養子にしよつと考へ、老中や水戸藩重臣の一部がこれに同調して動き始めた。経済的に困っていた水戸藩にとっては、より將軍家に近づき財政援助が期待できるから政治的に悪い話ではない。もし將軍の弟が藩主になると紀州の末流だった八代・吉宗の系統になってしまう訳だが、紀州藩祖の頼宣は水戸にも居たし、水戸藩祖・頼房とは母親（養珠院・お万の方・正木氏）が同じなのだから、徳川の血統を伝えるには不都合ではなかった。

しかし「独自の文化的要素」が強い水戸藩の

家臣団、特に中級、下級武士で、いわゆる「水戸学」に傾倒している連中が「藩祖・頼房公の血統第一」を主張して反対運動を展開した。反対運動の中心にいたのが会沢正志斎、藤田東湖ら後に尊皇攘夷派の旗頭となる武士たちであり、彼等に推されて斉昭が三十歳の部屋住みから水戸藩主の座に就いた。時に文政十二年（一八二九）十月、ロシア、イギリスなどの外国船が近海に出没して、鎖国という眠りに就いていた日本が否応なしに新しい文化、近代的な文明に目覚めさせられ驚かされる時代が目前に迫っていた時期であった。

徳川斉昭について一般に知られていることは、水戸に弘道館を建てて文武を奨励し、偕楽園を開いて梅の名所とし、かつ保存食の梅を生産し、蘭草（いぐさ）や牛蒡、綿の栽培、陶器を作らせるなど殖産興業策を進め、飢饉用糧食の備蓄、墮胎の禁止など農村の復興に力を尽くしたほか、社寺の改革統合を断行し贅沢を禁じ、冠婚葬祭を簡素化し、藩の財政再建に努め、人材の登用により藩政を改革したことである。そして何よりも大砲を鑄造させ、砲台を築き、海防を強化して軍事教練を行ったことは、他の大名に先駆けて外国の侵略から日本を護るという意識に基づいている。第七代水戸藩主の斉昭は、それ程の人物であり、治世の事跡に証明される稀に見る名君でもあり、また優れた文化人でもあったのだが、水戸藩に起きた多くの事件の影響もあって、幕末史では開国を断行した井伊大老の敵として文明開化を阻害したように思われている。

水戸藩及び府中（石岡）藩など江戸詰め藩の藩主は、殆ど自分の領地に来たことはない。主だった家臣もそうである。そうした中で斉昭は、藩主となった翌日に重役たちに指示して江戸勤務の人員を大幅に削減し、江戸詰めを交代制にしている。さらに自分も天保四年（一八三三）三月五日から約一年間、天保十一年（一八四〇）一月二十五日から天保十三年三月十八日まで水戸に来ていた。領内の具体的な政治改革は、実情を自分で見て決めていることがわかるのだが、江戸常勤を決められている水戸藩主がしばしば国元に帰ることは幕府の高官たちに疑心を抱かせる。その頃、幕府を牛耳っていたのは「天保の改革」を行った老中・水野忠邦である。その下には高野長英、渡邊華山ら文化人を迫害した儒者あがりの陰湿な目付・鳥居耀蔵が暗躍していた。

水戸の弘道館が開かれたのは天保十三年八月一日であるが同じ時期に水戸藩主徳川斉昭は、老中・水野忠邦に対して幕政改革の建言書を提出した。文中には皇室に対する幕府の態度を責める表現もあった。普段から斉昭の言動を苦々しく思っていた水野と鳥居が黙っている筈はない。その頃、將軍は第十一代の家慶（いえよし）に替わっていた。先代將軍の家斉が何時までも頑張っていて自分の意思が通せなかったこの將軍は、実行力のある斉昭を尊敬していて、後に外国船が頻繁に来るようになったとき斉昭に一切の外交交渉を任せたまま死んでしまったほどだから、天保十四年の五月には斉昭を江戸城に

呼んで藩政改革の労を多とし黄金百枚、名刀、馬具を与えた。授与式に立ち会った水野老中は「今に見ている！」というような顔で控えていた。斉昭は將軍から貰った黄金百枚を持って六月十三日に船で水戸へ向かい翌年まで滞在した。年号が弘化と変わり、五月には幕府から呼び出しがあって、五日に江戸へ戻った斉昭が江戸城へ帰国の報告をしようとしていたところ翌日になると「登城に及ばず」との達しが来た。間もなく小石川の屋敷へ、府中藩主の播磨守頼繩（はりまのかみよりつな）や水戸藩主、守山藩主ら支藩の三大名が神妙な顔でやってきて「水戸中納言殿、御家政向き、近年追々御氣隨の趣相聞こえ、且つ御驕漫相募られ、都て御自己の御了簡を以て、御制度に触れられ候事とも之れ有る由、御三家方は国持はじめ諸大名の模範たるべく候処、ご遠慮も在らせられず候由、御不興の御事に思し召され候：」と回りくどい言い方ながら斉昭が「勝手気ままな政治を行っている」として隠居を命じ、家督を鶴千代丸（慶篤）に相続させる、という上意を伝えた。

そうなると一年前に將軍が呉れた「褒美は何なのか、と言つことになり明らかに水野忠邦らの謀略である。悪いことには、それから数日後に江戸城本丸が火事になった。噂は恐ろしいもので誰言つとなく「水戸斉昭公が謀反を企んで江戸城に火を放った！」という怪説が飛び交った。斉昭は約半年の間、駒込の別邸に幽閉されてしまった。藩主・慶篤は未だ十三歳である。府中藩主たちに後見の役が与えられたが、水戸

藩内は幕府に忠実である者と、斉昭の名譽を回復しようとする者とに別れて対立することになり、この事件が幕末まで尾を引いて水戸藩が二つに割れ凄惨な殺し合いを演ずることになる。

斉昭が行った政策に神社仏閣を整理するという画期的なことがあった。神官や僧侶が神仏の名に事寄せて庶民の上に隠然たる権力を振るっていた弊害を正したのであるが正された連中は面白くない。本宮やら大本山に泣き付き、水野に手を回して斉昭を弾劾に及んだのである。斉昭は幽閉の身でも信念は曲げず老中の一人である阿部正弘に外交や軍備のことをあれこれと手紙で指示しているのだが、斉昭不在、藩主幼少の水戸藩は、保守系の重臣たちが権力を握り、改革派の家臣たちを罰した。これが発端となって水戸藩は尊皇攘夷の思想に固執する一派（主に能力の有る下級藩士）と、御三家として飽く迄も徳川幕府に忠実であらんとする一派（主に門閥に頼る上級武士）とが事々に対立し混乱に混乱を重ねてゆく。こうなると文化も文明もあつたものではない。

万延元年（一八六〇）三月、旧暦の節句に登城する時の大老・井伊直弼が現在の警視庁辺りで水戸と薩摩の浪士に殺害された「桜田門外の変」では浪士たち各自が襲撃の意図を記した斬姦（ざんかん）趣意書を持っていった。その中には幕府による内政外交の失敗、外国との条約締結に際して朝廷を軽視侮辱した罪、安政の大獄（勤皇の志士弾圧）の無謀などが書かれていたが、一項目、徳川斉昭が謹慎処分を受けたこ

とを非難する記述があった。謹慎処分には慣れている斉昭だが、この時は朝廷軽視を責めて不意に江戸城に行ったことを咎められたのである。本来、参勤交代の無い水戸藩は何時でも將軍の許へ駆け付ける任務があるのだから、「不時登城の罪は当て嵌まらない」と主張しても良さそうに思うが、相手が大老となると違ってくる。大老職は幕府緊要の場合にだけ置かれる職で、絶大な権限を有し、その決定は將軍でも覆すことは出来ないと言われていた。強気の斉昭も涙を呑んで謹慎中だったから、大老暗殺に関与していないのだが、幕府や井伊家彦根藩から暴挙の元凶と睨まれてしまった。口惜しさと国情への不安から体調を損ね八月十五日に失意のうちに世を去った。

当時の孝明天皇は極端な外国嫌いだと言われる。既に世界の情勢は日本の開国を否定できない状況だったのであるが、子どもが駄々をこねるように「攘夷」しか言わない天皇と、反対派を強権で抑えることしかない幕府（大老）の間に立って一番悩んでいたのは、文化人の水戸斉昭だったかも知れない。

権力も暴力には勝てず（現代もそうであるのは悲しいが）大老・井伊直弼は殺害され首を薩摩の有村次佐衛門に持ち去られた。有村も重傷を負って和田倉門の少し先の大名屋敷番小屋まで行き首を置いたまま切腹してしまった。首を探して現場に駆け付けた彦根藩の者が受け取るうとしたが、昔も今もお役所仕事は手続きが大切なので容易に渡して貰えない。まして時の大

老の首となるとなおさら面倒なので、井伊家は家臣の首としてやっと払い下げを受けた。主君の変死となれば藩存亡の大事である。幕府へは「急病」と届けておいた。幕府も事情は知っていたが、形式的に薬の朝鮮人参をお見舞いに届けてよこした。

事件の噂は忽ち江戸中に広まって物見高い江戸っ子は、これを話の種にすると共に「…やんれやんれ、花のお江戸の霞ヶ関なる、その又隣の桜田門外、三月節句に花見と雪見の新版ちよぼくれ、世上の皆さんお聞きなましよ、小人集まり国家を治めりや災害並びに至るといふこと、孔子の教えに有るではないかい、彦根の主が大老職をば勤めて以来（このかた）、掟はまもらず、家中は決まらず市中はたまらず、成る程そうだよ…」と、当時はやりの「ちよぼくれ節」に歌って圧政の憂さを晴らした。このうち「…小人（しょうじん）集まり国家を治めりや、災害並びに（次々に）至るといふこと…云々」は今でも当て嵌まるような気がしてならないのだが。

都々逸坊扇歌が、幕政を皮肉って江戸から追放され、石岡に没したのは桜田門外の変よりも八年前の嘉永5年（1852）であるから、残念ながら事件を風刺した都々逸は残せなかったが、扇歌から反骨精神を受け継いだ江戸の庶民は、首の無い大老に見舞いの朝鮮人参が贈られたことを聞いて迷作を詠んだ。

「人参で首を接げ（つげ）との御使（おんつかい）」

やがて斉昭の七男慶喜（よしのぶ）が一橋家を継ぎ、慶應二年（一八六六）には第十五代の將軍となった。御三家の水戸藩主は將軍の兄である。仕方が無いと思いつつも、弟に頭を下げる矛盾に何かシツクリせずにはいられないから藩内の政治も混乱する道理である。慶應三年の春に天狗党事件の巻き返しで殺伐とする領地に初めて足を運び、水戸城で急死してしまった。

慶篤の跡目を継いで第十一代水戸藩主になったのは斉昭の十八男（慶喜の異母弟）で十五歳の昭武である。しかし、この時には幕府から將軍の名代としてパリで行われる万国博覧会に出席し、引き続きフランスへ留学するよう命じられていて日本には居なかった。つまり水戸藩は明治維新を迎える直前の大事な時期に少年藩主が花の都パリに居たのである。文化的と言えは文化的だが、その留守中に慶喜が朝廷に大政を奉還して徳川幕府が瓦解したから留学は一年半ほどで終わった。当時、徳川幕府にはフランスが肩入れしていたのでパリ万博に招待されたもので、昭武たち水戸組は幕府からイギリスへ向かう幕府の外国奉行一行と共にヨーロッパへ向かったのである。余計なことだが現在、パリの名所となっているエッフェル塔はその時の（パリ万博）モニュメントである。

徳川昭武のフランス行には、水戸藩から七人の武士がお供を命じられていた。京都の本圀（ほんくわん）寺に詰めていた攘夷派の武士である。水戸光圀の「光」は三代將軍から貰った名だが、初め「光国」と書いていたのを、本圀寺から一

字貰って「園」に変えたとする歴史家の説がある。常陸太田に久昌寺（光園生母・久昌院の菩提寺）があるように水戸藩主、と言っよりは英勝院 太田道灌の子孫で藩祖・頼房の義母 や養珠院（頼房の生母）、さらに久昌院など女性信者の影響で水戸藩主は日蓮宗の高僧と親しかったから、日蓮上人ゆかりの名刹である本園寺を借りて、京都における幕末の拠点にしていたように四百名ほどいた「本園寺派」は皮肉にも後に將軍・慶喜の護衛をさせられた。

昭武のパリ行きは、幕臣の勝海舟らが咸臨丸でアメリカへ渡ってから八年後のことではあるが、当時、スエズ運河は未だ完全に開通していなかったようでパリまで行くには遙々と船旅を重ねなければならぬ。その様な苦勞をしての洋行だから多くの文化的収穫を得てきたと思うのだが、水戸藩の武士たちは基本的に攘夷思想に被れていてフランスなど頭から信用していない。チョンマゲに二本差し下駄履きでパリ市内をのし歩くから、物珍しさで寄ってくる市民もいる。それに腹を立てたり、万博に来て居る西洋人と喧嘩したり、何かにつけて衝突を繰り返して、何のために来たのか分からない。勿論、西洋の事情や風物文化などに目をくれようとしなかった。さらに公式に同行していた幕府の高級役人たちは、フランスよりも進んでいるとされるイギリスへ早く行きたくて仕方がない。フランスなど前座にしか思っていない。この一行に「庶務係」として従っていた青年

かぶれ」で倒幕運動などをしていて役人に追われ、知り合いを頼って京都にいた一橋慶喜の屋敷に匿われた。名は分からないが慶喜の用人に優れた人物がいて、見込みのあるこの青年を足軽として雇ってくれた。改心した青年は一橋家のために尽くし、慶喜に認められて特に洋行させて貰ったのである。水戸藩士や幕府役人が退屈しているだけのパリ滞在中に、この青年は暇さえあれば市内を巡り歩き、目に触れるもの、聞いた話、感じたことなどをメモし体得し、特に武士も町人もない身分制度と株式による資本の協力を驚いた。明治元年（一八六八）末に帰国したとき、前將軍・徳川慶喜は静岡に隠棲していた。恩顧のある慶喜の傍近くで事業を起こそうと考えていたところへ新政府が慶喜に命令して青年を大蔵省へ出頭させた。この男こそ、初代大蔵次官から松方内閣で大蔵大臣を懇望されながらも実業界に入り、第一国立銀行頭取に始まって「大御所」として日本の実業界に君臨した渋沢栄一である。

藩主以下、何名かの武士が西洋という当時の未知の世界、未知の文化に触れる機会を得ながら何も得るところ無く帰国した水戸藩は、明治という近代文明の時代を迎えても変わらない体質のまま茨城県になったと考えざるをえない。渋沢栄一が帰国した頃、水戸城は一旦退去した保守派（反政府軍）の攻撃を受け「弘道館の戦い」が起こっている。迎え討つたのは越前敦賀で虐殺された天狗党生き残り（未成年などの理由で死罪を免れた武田金次郎など）らの水戸藩

及び新政府軍で、激戦が展開され双方で百数十人の戦死者が出ている。折角、斉昭が建てた弘道館の一部も焼けたよう、戦死者の墓も今は不明と聞いた。

明治維新の混乱を引きずる茨城県の荒廃は明治初年に最も甚だしかったと言われる。それは近代的な産業の発展や教育文化の遅れにつながり、明治八年における小学校への就学率は全国平均より低かった。明治十二年には教育令が出されたが、それでも女兒の就学率が五〇％に達したのは明治三十年になってからである。そうかと言って、県民の文化程度が低かった訳ではなく、茨城県下人民の気風は依然として卑屈のようになり、間々論客あれど時候遅れの祭政一致論を為す者多く、学者と称するは国学・漢学の先生にて「云々」と或る新聞に書かれたように国粹主義者のような人物が多かったのである。頭が固すぎた茨城県の人たちは昭和二十年、民主主義国家日本の誕生でようやく融通が利くようになり文学、演劇などに打ち込む人々が多くなった。近年は高齢化社会が特定の文化を盛り上げていく傾向にある。平成十六年、石岡の市制五〇周年と石岡市文化協会創設五〇周年を記念して記念誌が発行された。それには民謡舞踊、詩吟、音楽、三曲、郷土芸能、華道、茶道、短歌、俳句、俚諺、盆栽、養菊、かるた、将棋、囲碁、子供劇場、ビデオ、雑文の各同好会の活躍が記録されている。しかし旧八郷町との合併が実現した後も文化協会活動は別々に行われているらしく、合併とは何かを考えさせられる。

地域には地域の文化があるのだが旧・八郷町に
続いていた町民文化誌も合併でなくなってしまう
た。地域文化とは、雑草のように埋もれてい
る住民のささやかな活動が、行政の庇護のもと
に育つてゆくことではないか…と思っただけが、
文化の谷間のような経歴のある県や市にそれを
望むのは無理かも知れない。

史跡めぐりに同行して

兼平ちえこ

歴史の苦手な私に、知人から歴史ボランティアの
会員養成講座の受講を薦められたのが6年前のこと。
天狗党員だった先祖のこともあって、参加することに
したのでした。そこには私の想像もなかった深い歴史の
舞台が繰り広げられていました。

石岡市は、茨城県のほぼ中央に位置し、西に筑波山、東に霞ヶ浦を望み、風光明媚なところで、
気候も温暖で天災も少なく、海山の幸が豊富で、
常世の国とも呼ばれ、有史以前から人々の生活の場として
ひらけ、旧石器、縄文、弥生時代にいたる遺跡が発見
されました。

邪馬台国の女王卑弥呼。大和政権が九州から関東を支配していた古墳時代には、大豪族の墳墓「舟塚山古墳」が、
そのおよそ一世紀後には「府中愛宕山古墳」が築造され、
今の世にも雄と県内最大規模をもって石岡の台地に誇っています。

大化の改新(六四六)後、茨城県のほとんどが

常陸の国として誕生しました。西暦七四一年には、
聖武天皇が不安定な政治を立て直すための国家安泰策として、
また当時全国的に流行していた伝染病から人々を救うための
万民息災を仏教の力を借りようと、国分寺・国分尼寺建立の詔を
発しました。

分尼寺が建立されました。そして、同時代に地下の正倉院といわれた鹿の子遺跡には、農耕用具や武器、武器を生産していたとされる、
官営工房がありました。国府の置かれた石岡は、政治文化の中心で、
奈良の都から赴任してきた長官は国司と呼ばれ、常陸国内の神社の管理と祭事の運営は重要な任務の一つでした。
その中に、常陸国内の各神社を訪れて参拝(神拝)するという行事があり、

石岡市柴間 ギター文化館発

ことば座「常世の国の恋物語百」第三回公演

= 常世の里うた特集 =

第五話「漆黒と雑木林と星たち」第六話「風に戯れて恋歌の呟いて」
万葉集より「ひたち恋歌」

2007年7月15日(日曜日)

= 13:30 開場 14:00 開演 =

(料金: 前売券 2500円 当日券 3000円)

ことば座第3回公演は、「常世の里うた」と題して、詩物語を特集いたします。舞姫・小林幸枝の恋歌朗読舞の魅力をお楽しみ
いただきたいと思います。

小林幸枝が自らの詠んだ歌に舞を舞い、近藤治平がふるさとの風への恋心を一行の呟きに歌います。
ふるさと風の会の兼平ちえこが挑戦する、常世の国の暮らしの顔五百、色に刷いたふるさとの風舞を背景に常世の里の恋歌を、小林幸枝ならではのスケール感で切なく、美しく舞います。

星に願いを…。
私は、
私の願いを声にしてしまつたら、
待つことも
耐えることも
できなくなってしまうのよ。
(漆黒と雑木林と星たちより)

前売チケットはギター文化館(0299-46-2457) 石岡市中町商店街カフェ・キーボー(0299-23-1100) ことば座事務局FAX(0299-23-0150)にて受け付けております。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5

1 35

0299 24 2062 fax 0299 22

これを簡略化するため国内の神社の神々を一つに集め祀ったのが常陸国総社宮といわれました。武家の祀りとして「武運長久」を祈願したのが始まりの常陸国総社宮大祭は、江戸時代中頃からは町人が参加して「家内安全」「無病息災」を祈願する現在のお祭りになりました。このお祭りが古い歴史を目にするこの出来る文化遺産として誇れるものと思いました。

平安の世から、安土桃山時代へと、常陸国の中心地であった石岡のロマン溢れる歴史の深さに驚嘆するばかりでした。しかし、この奥深い石岡の歴史を市民の皆さんが、あまりご存知でないことには、歴史の深さ以上に大きな驚きでした。

五月二十四日、国府地区公民館主催の「石岡市近隣の史跡めぐり講座」に、石岡市歴史ボランティアの会講師、濱田先生に同行させて頂く機会を得ることが出来ました。受講を希望され方が多く、大変な倍率で、選ばれた方々の熱心な学習ぶりに、六年前の歴史に対する意識が少なかつた驚きが覆されることとなり、確実に市民一人一人の意識がたかまつていることを感じ取ることが出来、感激いたしました。先人の方々の懸命に生きた証を知り、この大切な歴史を後世へ語り継ぐということは、現在の荒廃した日本人の心を癒し、豊かな心を育む事と思います。

一行文特集第二弾

暮らしの風の発見

白井啓治

一行文は、以前にもこの紙面に紹介したが、取材に出かけた折のメモとして心象を一言に落とす事から始まり、その後種田山頭火に影響を受け、自由律の一行詩として日々の風をノートに落として楽しんでおり、人にも薦めています。

一行文というのは、無駄を省いた心象表現文という意味だから、無駄な説明を省いた自分にとって一番短い表現文であれば、三行でも四行でも一行文と呼んでいます。

一行文は、自分を発見する楽しさに遊ぶものです。発見の遊びですから難しく文章を考えないで、発見したことの一番心象に残った言葉を一言紙に落とすと考えることです。

最初は、文の頭に『今日は楽しかった、または嬉しかった』というように発見の方向の言葉を置いて、今日出会った楽しいこと、嬉しいことを発見し、説明ではなく楽しい、嬉しい言葉をさがしてみるといいでしょう。例えば、今日は嬉しかった赤い花の笑顔、というように、一番心に残っていることを一言の言葉にして紙に落とすことです。

これを仮に、今日は嬉しかった赤いバラの花が私に微笑みかけてくれてるように思えた、というように書いてしまうと、心の余韻が削がれ、大切な心象が薄れてしまいます。

また、一行文は暮らしの中に吹く自分だけの小さな風と考えると良いでしょう。自分だけの暮らしの風として自分の心象発見を自分で褒め、自分で楽しむ、と考えて他人の目、他人の評価を気にする気持ちを捨てて、自分の言葉に落とす事が大切です。

今日は、カフェ・キーボードに開かれている絵と一行文教室に学ばれている皆さんの一行文と、ふるさと風の会の兼平ちえこさん、伊東弓子さん、近藤治平さんの一行文をまとめてみました。

廣岡道子 絵と一行文教室

筑波嶺に深紅の落日心洗われて

・啓蟄 虫に負けじと吾も飛び出す

・春の夜空 美しき満月に寒さ忘れ

・嬉しきかな遠住の友より花見の招き

・残業の夫三五〇のビールでコックリ

歳相応にしてネ 仕事

・被爆の子八・六 黙禱捧げて六十一星霜

今年も元気で 亡き両親の加護か

・朝顔のつるの中よりバラ一輪

・小さい春見つけに 子等の手を借りて

・孫娘一月ぶりの帰省

祖母の欲目がチョッピリ大人に

有村政子 絵と一行文教室

・何か幸せ 誕生日私と一緒

・こたつから頭だけ出して暖まっています

・ほんの五分間 雪が降りました

・バラを見て昔のバタークリームのケーキ

思い出しました

- ・友の慰め少しズレています
- ・秋空に深呼吸

- ・月の光りの重さで家々が潰されそうです
- ・ちよつと隠れた朝日を待っている時間

お願い事が増えそうです

- ・枯れ草の土手 名も知らぬ花が今主人公
- ・私だけに使った今日の日
- ・朝日に向って目を閉じたら顔が色づいた
- ・満開の花が霜柱の音を聞いてます

塚本さち江(絵と一行文教室)

- ・庭のゆず お風呂に入れてぼつかばか
- ・椿のかたい蕾がたくさん

寒さに負けず生きているんだな

- ・赤いランタンキュラス庭に植えて心うきうき
- ・土手の草むらの中にてんと虫
- ・庭のシャラの木の小さな芽吹き春が来る
- ・人間肩書きじゃなくて人格なんだナ
- ・孫と砂遊び我を忘れて砂まみれ
- ・庭のバラの花雨にぬれてお色直し

木村靖子(絵と一行文教室)

- ・いつ沈むのかと夕陽見ながら長い一日
- ・岩の隙間に咲く薄紫のスミレ草
- ・地下足袋の婦人の額の汗夏を映している
- ・青田に白鷺の行列
- ・唄いながら帰る道
- ・シクラメン肩より添って拍手する
- ・春が大きくなってきた

- ・空のお弁当箱に花びらのおみやげ
- ・三十年ぶり 振袖の広げてみる
- ・紫陽花 たくさんの蕾みつけてます

伊東弓子(ふるさと風の会)

- ・南天の葉の赤く続く路地
- ・つなげた犬 猫を見ている
- ・旧家の板塀 長く長く
- ・見あげれば青空に桃の花よう似合う
- ・糸たれて ただ糸たれて動かず
- ・はげしい言葉に珈琲も苦さまし
- ・墓の前で煙草吸う老女いて
- ・夕焼けの中 人が立っておる
- ・広い畑に一輪車傾いて捨てられて

兼平ちえこ(ふるさと風の会)

- ・苔の墓原 祈りの山 緑風通る
- ・黙ってついてこい 歩ゆるめず 町石道
- ・ひがみ やつかみ 笑顔は皺の中

(同窓生五人の再会)

- ・春灯り 菜の花畑
- ・前へならい! でこぼこねぎ坊主
- ・十本十色ねぎ坊主
- ・よりそって こいのぼり ひとやすみ
- ・モコモコ あちこちみどりのいのち

近藤治平(ふるさと風の会)

- 「風に戯れて恋歌の呟いてより
- ・せつなく恋心の紡いで肩のつめたく
- ・こんなに好きなのに

こんなに愛しているのに独りごと

- ・まどろみのなか想うは妹のことばかり
- ・満月 妹の顔映している
- ・雨戸打つ風に妹の想う
- ・この道いくしかない 曼珠沙華の咲いておる
- ・道が二つにわれている どっち行く
- ・声しても心えのみえず
- 片想いの寂しく一人夜に呟いて
- ・恋告げ鳥の 肩にとまって君の心啼く
- ・この手のひらに 君の乳房のあたたかく

ナナちゃん、鼻水垂れてるよ 小林幸枝

五年前のゴールデンウィークのこと。母の友人の家の前に五匹の子犬が捨てられていた。どうしようか、と連絡があったので早速、子犬を見に出かけた。

「笠間の動物センターに連れて行こう」

「何処かに捨ててこよう」

皆それぞれ勝手なことを言い合っていたけれど、私は何とか里親を見つけ、五匹の子犬が育てられることを願い、考えた。

「おばさん、オスの一匹だけ飼ってくれない。」

あとは私がつれて帰って里親を探すから。飼うのがどうしても無理だったら、私、里親を探すから

そうお願いして、糞に汚れた四匹を家に連れ帰ったのだった。

糞まみれの子犬を風呂に入れて洗っていると
両親が見に来て、

「全部飼うのか？」

と非難の顔でそういった。

「里親が見つかるまでね」

「里親が見つからなかったらどうするんだ？」

父は、私を信用しない顔でそういった。

「大丈夫！」

父にそう大口を叩いたのだったが、現実は大
変。主人の知人からオスなら飼っても良いと連
絡が来た。翌朝、おばさんの家に里親が見つか
ったと子犬を引き取りに行ったら、子犬がいな
かった。どうしたのと聞くと、娘が鳴き声があ
るさというので、おじさんが捨ててきたとい
うのだった。

「何で直ぐ私に連絡くれなかったの！ 何処
へ捨てたの？」

私は、子犬を捨てたという雑木林に慌てて出
かけ、探し回ったが、とうとう見つけることが
できなかった。雑木林の側の畑に、おじさんが
いたので聞いてみたが、鳴き声も聞かなかった
という。私がいかに心配そうな顔をしていた
からだろう、おじさんは、もしかしたら誰か子
供が拾って家につれて帰ったかもしれないな、
と慰めてくれた。

おばさんやおじさんを非難することは簡単だ
けれど、どうして平気で子犬を捨てられるのだ
ろう。雑種の犬だって、折角命を貰って生まれ
てきたというのに。人間の勝手に、捨てるなん
て。子犬が、おじさんの言うように誰かが拾っ

てくれたことを願うしかなかった。

母親が側についていない子供の小動物ほど驚
や鷹などの猛禽類やカラス等にとって絶大な獲
物はない。でも、捨てられた子犬が鷹やカラス
などの餌食になったのなら、自然界の食物連鎖
と考えれば、ある種納得する部分もある。しか
し、自然界に生きる術も知らない子犬が飢えで
野たれ死んだり、車に轢かれて命を落としたり
したのであまりに悲劇だ。勿論、子犬をおば
さんの家の前に捨てていった人が、一番の虐待
者なのだけれど。

動物愛護のレベルと文化のレベルは比例して
いるといわれている。生まれた子犬を捨てるな
んてもつてのほかだけれど、しつけの悪さも大
変な虐待なのだ。私は散歩の時に、庭に放し
飼いにしている犬が飛び出してきて足を喰いつ
かれ、演劇公演の前に大怪我をさせられたこと
があった。ペットとして人間社会に生きる犬達
にとってキチンとしたしつけは、愛護そのもの
なのだけれど、情けなくなってしまう。

この「ふるさと風の会」の先輩方は、石岡の
文化レベルの低さに大きな嘆きを洩らされるけ
れど、捨て犬やしつけの悪さをみると、先輩方
のお嘆きは良く理解できる。

我家に来た四匹の子犬の中で一番小さくひ弱
だったのがナナちゃんだった。糞にまみれて捨
てられてあつた所為なのだろう、子犬たちは細
菌症の感染で次々と酷い下痢をおこし、食欲も
なくなり、毎日一匹ずつ動物病院に連れて行か
ねばならず、随分と出費がかさんだ。

毎日違う子犬を連れ込む私に、獣医さんは捨
て犬？」と聞かれた。そうなんです、と言つと、
獣医さん同情して治療費を随分安くしてくれ、
里親探しもしてくださった。

三匹の子犬は元気を回復したが、小さなナナ
ちゃんは元気を取りもどすどころか、危険な状
態にまでなってしまった。食欲も全くなく、立
ち上がることもできなくなってしまった。

慌てて動物病院に連れて行ったら「これはち
よつと難しいな、今夜一晩もたないかもしれない
い」と言われた。大変なショックで涙があふれ
て止まらなくなってしまった。獣医さんに気休
めでも注射だけしてくださいとお願ひし、家に
連れ帰った。

家に帰ると、湯たんぽを入れて暖め、体を手
で摩つてやり、目を覚まして！ と必死に祈つ
た。あふれ出た涙が頬をつたい、ナナちゃんの
顔に落ちた。私がいかに沢山の涙を流すので、
ナナちゃんの鼻の上にも落ちてしまったのだ。
窒息させるのでは、と慌てて拭いてあげた。

でも、それで奇跡が起こったのでした。獣医さ
んからも、可哀そうだけと諦めるように言われ
ていたのだけれど、ナナちゃんが突然に目を覚
まし、ふらふら立ち上がったのでした。そして、
オシッコまでしたのでした。

獣医さんにそのことを直ぐに連絡したら、暖
かくして、ミルクを温め少しずつ飲ませてくだ
さい、と言われた。

私は一生懸命手で摩り暖めてあげ、ミルクを
少し飲ませてみると、ナナちゃんはちゃんと飲

んでくれた。

翌朝、ナナちゃんは随分と元氣を取りもどし、ミルクも飲んでくれた。元氣を取りもどしてきたナナちゃんを見ながら、この子は私が育てると心に決めたのだった。

三匹の子犬たちの里親が決まった。最初に里親が決まったのは、モモちゃんと名付けた子犬。茨城町に住む獣医さんのお姉さんの家に貰われていった。今、茨城町では空き巣が多発しているそう、モモちゃんの近所でもあちこち空き巣にはいられているのだとか。でも獣医さんのお姉さんの家では、留守にしてもモモちゃんが確り番をしている所為か、空き巣に狙われることはないのだそうだ。

ブルーちゃんと名付けた子犬は、つくばの方に貰われていった。

ブラックちゃんと名付けた子犬は、少しかわいそうなおことがあったが、今は幸せ。ブラックちゃんは、両目の上に白い斑点がある子だった。最初に貰われていった家のお爺さんが、この犬は四つ目のように縁起が悪いから返せと、と言われ、戻されてきたのでした。でも五ヵ月後、これも獣医さんの友人で、東京の狛江という所にお住まいの方に貰われていって、幸せに暮らしている。

ナナちゃんはとても元氣になりすくすく可愛く育ち、里親希望者が何人も現れたのですが、全部お断りした。

我家には五匹の犬がいて、ナナちゃんはボス犬のポピーちゃんに威嚇されて耳をかまれて血

を流したりしたことがあったけれど、負け犬にもならず、今ではポピーちゃんからボスを引き継ぎリーダーとなっている。

犬同士では強いナナちゃんだけれど、弱点が二つある。一つは雷が怖いこと。もう一つは寒さに弱いこと。特に寒さにはめっぽう弱く、少しでも寒いとぶるぶる震えだし、鼻水をたらすのだ。犬は寒さに強いというけれど、ナナちゃんに限っては間違い。冬になると炬燵に入ったきり出てこようとしない。

先日のこと、私が炬燵にもぐって昼寝をしていたら、顔に水が垂れてきて、ビックリして飛び起きたら、ぶるぶる震えているナナちゃんの顔が私の上にあった。上手く炬燵にもぐりこむことが出来ないで、私の顔の上で震えていたのだ。そして、鼻水を顔に落としたのだ。

「こら、ナナちゃん私の顔に鼻水垂らすな！」でも、怒れないな。ナナちゃんが生死の境をさまよっている時、私はナナちゃんの鼻の上に涙を落としたんだから。

私も寒いのが嫌い。

「ナナちゃん二人で、ズーツと仲良く暖めあおうね」

吾に抗って吾を怒つ

近藤 治平

叶わぬ恋に何時まで未練をするのかと心に尋ねるも応えのなく独り眠るのを恐怖する老いの哀れ。

独り吾に愚痴を聞かせても慰めにもならず益々に辛さ切なさのため息に肥やし撒く哀れなる瘦せ男。老いがめめしさを連れてやってくるも受け入れがたく抵抗してみるも老いの力のなんと馬鹿力。ついに受け入れて堪えても涙の止まるを知らず諦めて流れ落ちるに任せる。この涙の枯れたら疲れ果てて意識の捨てた闇の眠りにつくことが出来るだろう。だから気にせず涙を流し続けると闇に向って声のなき咆哮をするもただただ老いの哀れ。心失った詰まらぬ一行の詩の積み上げて尚一層の哀れを想う。まだ曙のきこえず。耳鳴りの一層に大きく老いたる瘦せ男明日は、溜めの雑木林に迷って死暮れか。

恋歌を道に落として拾う力もなく
雑木林に行き暮れて一人

この道何処へ尋める人もなく
ただ喰って ただ寝る 明日は死暮れの日
哀れに思いつ心も雑草の中に捨てて
煙草は毒だと だが何時まで生きる

明日に死暮れのみえておる

恋歌を詠うなと「オロキ 秋の死暮れて
おまえ何処行く おれ行くとこさなし
水差しの赤い花 今日首の垂れて死暮れ
赤い花はもつ似合わない瘦せ男

今日はここに生きておる瘦せのへんぺん草
明日は想うなと名も知れぬ草の言つ
老いた瘦せ男あすの日のあるかと問うてみる
哀れは捨てた恋も捨てたみんな捨てた

瘦せ男独り

告知板

ふるさと風の会が新会員を募集のお知らせ

ふるさと風の会では、ふるさとの暮らし・文化を真面目に、自慢する新会員を募集しています。表現のジャンルは問いません。歴史から芸能・暮らしの知恵・こぼれ話などふるさとを物語として文章に表現していく方々の入会をお待ちしています。ふるさと風の会への入会のお問い合わせは、左記会員まで。

打田 昇二 0299224400
兼平ちえこ 0299267178
伊東 弓子 0299261659
白井 啓治 0299242063

カフェ・キーボー「ふるさとルネサンス」 『小林幸枝の朗読舞ライブ公演』のお知らせ

ことば座・朗読舞の小林幸枝がカフェ・キーボーふるさとルネサンスの舞台に、六月二十四日（日曜日）八ヶ月ぶりに帰ってきます。

小林幸枝が朗読舞に出会い初めて舞台に立ったのが二年前の6月。昨年十月に、座長として脚本家近藤治平と「ことば座」を立ち上げて以来のこと。近藤治平の小林幸枝のために書き下ろしたふるさと恋歌「恋瀬川物語」
「朗読舞古今和歌集 他を演じます。

公演は、午後2時～3時半。

ライブ入場料 1500円。

「ことば座」からのお知らせ

ことば座風の塾

ことば座では、6月より第二、第四土曜日、府中公民館小会議室にて「朗読舞」「朗読」「文章」の各教室が開講します。各教室10名程度の受講生を募集しています。入塾は定員まで随時受け付けております。受講料は、各教室月額3000円。お問い合わせは、ことば座事務局まで。

ことば座・ギター文化館第二回公演

ことば座第三回公演は「常世の里うた」と題した、詩物語の特集です。小林幸枝の恋歌朗読舞の魅力をご存分にお楽しみいただきたいと思います。

第二回公演から「ふるさと風の会」の兼平ちえこさんが、舞台背景画として「常世の国の暮らしの顔五百」に挑戦して頂いております。小林幸枝が自ら詠んだ歌を近藤治平が脚色した「漆黒と雑木林と星たち」は、石岡に生まれ石岡に育った自らの半生を振り返り、明日への希望を紡いだ常世の国の女の物語として、深く心に響く朗読舞です。今回はギター文化館に相応しく、小林幸枝の舞にギターの風が吹いて流れます。

七月十五日（日曜日）午後一時半開場、午後一時開演。前売券2500円。ギター文化館カフェ・キーボーにて発売。また、ことば座事務局へのFAX申し込みを受け付けております。

ことば座俳優塾開設のお知らせ

ことば座では、ふるさと風の会に創作されるふるさと物語を朗読劇に表現する俳優を育成するための俳優塾を九月に開設する予定であります。年齢制限はありませんが、第二の人生をふるさと語り劇俳優としてチャレンジしてみたい方の連絡お待ちしております。入塾には簡単な表現力試験があります。

ことば座事務局（白井）

電話0299242063

FAX0299230150

編集後記

嬉しいことが続いている。このふるさと表現紙ふるさと風」をお読みいただく方がこのところ着実に増えてきている。励ましのお手紙も頂く。先月には、創刊号から読んでみたいと、小紙のバックナンバーをご希望される方もいらした。小さな小さな会ですが、夢を紡ぐ心意気だけは常世の国一番だと密かに自負しています。小会で、一緒にふるさとを自慢する新しい会員を募集することとなりました。定期的に勉強会なども開いていこうと考えております。真面目にふるさとを自慢したいと考える方々の入会をお待ちしております。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

（白井啓治方）